

『平家物語』における助動詞「ータリ・リ」

——文末に使われた場合——

鄭 霞 清

一、はじめに

完了助動詞「ータリ」と「ーリ」の成立は、ともに「存在する」意味をあらわす動詞の「あり」と関係があることは早くから先行研究ですでに明らかにされたことである。それにその意味にも「あり」の意味が働いていて、動作・作用の継続や結果の存在などと言った状態の意味に用いられるとよく言われた。その多くの研究の中、完了助動詞「ータリ・リ」を動詞の語形の対立的システムの中の一つのテンス・アスペクト形式として、そのテンス・アスペクトの意味を研究した鈴木泰氏の（一九九二）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』

は古典語の完了助動詞の「ータリ・リ」に対する理解と究明に一つ大きな手助けになったと思われる。鈴木泰氏はまず、「ータリ・リ」形には（一）変化の結果の継続、ないしは単純な状態（二）動作の完成とその結果の存在の二つの意味が認められるということができよう。」という結論を出され、そして会話文と地の文の区別などから、基本形との違いについて、

(1) 「ータリ・リ」形においては、会話文と地の文で別別の形態論的なアスペクトがあるのでなく、形態論的なアスペクトは一つであるということである。これが会話文と地の文ではアスペクトが違うのではないかと考えられる基本形との最も大きな差であろう。」

(2) 「ータリ・リ」形が基本形と違うもう一つの点は、基本形が

その動詞がどのような意味であれ、おおよそすべての動詞の形態でありうるのに対して、「タリ・リ」になる時は、その動詞が意味的にかぎり限られてくるという点である。それはその意味する運動が何らかの結果性を存在せしめるものでなければならぬということである。」と論じられた。

これは『平家物語』においても同じであらうか、また、『平家物語』の多彩な文体という特質は完了動詞「タリ・リ」のアスペクトの意味に何らかの影響を与えているか、などについて考えてみようと思う。本来会話文と地の文に分けて、テンズの意味を含めて基本形と比較しながら考えなければいけないが、これは次回に試みることにする。ここではまず会話文と地の文をまとめてテンズの意味を考慮した上アスペクト的観点から『平家物語』における、文末に使われた完了動詞「タリ・リ」の使い方を考察してみる。

『平家物語』には文末に文の言い切りとして使われた完了動詞「タリ」は約五百例で、「リ」は約二百例がある。動詞「タリ」と「リ」の使い分けについて、多数の先行研究があるが、例えば「タリ」は「話し手が素材を批判的、冷静的に客観的に眺めたと自ら意識した場合に用いられる」、「リ」は「話し手が素材を情緒的な気持ちを抱いた場合に用いら

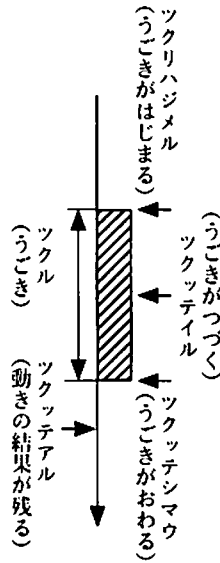
れる」(柿下好登、昭和二八)などがある。しかしこれはアスペクトの意味の違いではないから、ここでは(鈴木泰一九九二)の「タリ形と「リ」形は、接続する動詞の活用が違っただけで、テンズ・アスペクトの意味は違わないと思われる。「リ」形がいわゆる完了を表す形態論的な語形として確立するに及んで、その形としてふさわしくないで、それを補うものとして発生したのが「タリ」形であると考えられるからである。従って、特に区別せず、「タリ・リ」形としてまとめて扱う。」という考え方をとり、それと同じく、「タリ」と「リ」を区別せず、「タリ・リ」としてまとめてどんなアスペクトの意味を果たしているかを考察していくことにする。

また、動詞の種類について、①A動作動詞(主体動作・客体変化を表す動詞)、②B動作動詞(主体動作を表す動詞)、③変化動詞(主体の変化を表すもの)、④性状動詞(アスペクト対立がなく、特性、形状、関係など、形容詞の意味を表すもの)という呼び方をする。これは基本的に(工藤真由美一九九五)等の現代日本語の動詞に対する分類方法を参考にしたが、今回、下位分類などはせず、まとめて古典語の動詞としてアスペクトの意味から分類したのである。また、「動作」(運動の形態)であれ、「変化」(運動の内容)であれ、宇宙間の運動現象に対す

るとらえ方の違いから名付けられた(奥田靖雄一九七九)ことから、動作と変化をまとめていうとき、或いは動作か変化か区別しないとき「運動」という言い方にする。

アスペクトという言葉の意味は現代日本語の研究によれば、「すがたともくろみ」(高橋太郎一九六九)の図付きの

図一、



「動詞の表す動きの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味を「すがた (aspect)」という」解釈があったが。

(鈴木泰一九九二)には「アスペクトは、基準時間に置いて、運動がそれに内在するどれかの局面の持続過程にあるか、又はそうした局面に分割されないひとまとまりのものとしてあるかという、基準時間における運動の時間的展開のあり方を表す文法範疇である。」「アスペクトの意味にはおおよそ①完成相、②

継続相、③パーフェクトといった三つに区別されている」と記述された。ここではまず完了助動詞「〜タリ・リ」はその「運動がそれに内在するどれかの局面の持続過程にあるか」の「どれかの局面」を表しているかについて考察してみる。

二、動作の完成

1、小兵といふちやう十二束三伏、弓は強し、浦ひびく程長鳴して、あやまたず届のかなめぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射きつたる。鎧は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。(巻⑩三七三二二)

2、入道みづから、板敷たからかにふみならし、大納言のおはしけるうしろの障子を、さつとあけられたり。素絹の衣のみじからかなるに、白き大口ふみくくみ、ひじりづかの月、おしくつろげてさすままに、以ての外にいかれるけしきにて、大納言をしばしにらまへ、…(巻②二二八一二二)

3、二月十六日の丑剋に、渡辺、福島を出でて、あくる卯の時に、阿波の地へこそふきつけたれ。(巻⑩三五七一一)

の前の二例とも、下線部のようなその動作を行うまでの状況の説明と、「ひいふつと」「さつと」のような、動作を行った

時点の状況の説明がある。それにその動作が終わった後、次の動作に移っていた。3の例では動作の行う時間が明記されているので、それに後続する文がない。従って、この三例は、その動作はその時点に行つて、かつ、その時点で終わったということであろう。つまり、完了助動詞「〜タリ・リ」はこういった継続的、または動作の行う時点が明記している文脈の場合、その動作の完成を表しているということである。これは現代日本語の完成相の「〜シタ」とほとんど同じである。時間の軸の上では、ひとまとまりの形である。

図2、



三、動作の継続

ここではまず例を見てみよう。

4、一如房の阿闍梨真海、三、申しけるは、「三」と、程をのばさんがために、ながながとぞ僉議したる。(巻④三二)

五一―)

5、矢さけびの声の退転もなく、鐘のなりやむひまもなく。

三日がほどこそたたかうたれ。(巻④二八九―六)

の二例ともそれぞれ「ながながとぞ」「三日がほどこそ」のよ
うな動作を行う期間の副詞を表す言葉を伴っている。であるか
ら、この「〜タリ・リ」形式はそれらの動作はその期間内に
ずっと継続して行っていたということが分かるであろう。これ
は現代日本語の動作動詞は「〜テイタ」形で過去のある期間内
に進行していたことを表すのとほとんど同じであると思う。テ
ンスとして過去であるが、アスペクトの意味としては継続相で
ある。また、

6、「三」とかきくとき、袖をかほにおしあててさめざめと
ぞ泣きゐたる。良久しうあつて、さてもあるべきならねば、
鍙直垂をとつて頸をつつまんとしけるに…(巻⑨二五〇―
七)

7、舟はゆりあげゆりすゑただよへば、扇も串にさだまらず
ひらめいたり。おきには平家舟を一面にならべて見物す。
陸には源氏くつばみをならべて是を見る。(巻⑩三七二―
八)

の6例は、「泣きゐたる」「時間の長さをしめす」「良久しうあつ

て」と、「泣きあたる」間に頭の中の思考運動をあらわす「さてもあるべきならねば」といった後続した文から、「泣きいたる」はその動作がまさに行っている最中のことをあらわすことが分かる。これは「泣き居る」というような動詞自身本来「まさに継続中」という意味を持っている特質にも関係があるかもしれないが、普遍現象とは言えなくても、「元了動詞」「タリ・リ」はこのような動詞につくと動作は今現在まさに継続していることをあらわすことができると言えるであろう。また、7例の「見物す」と「是を見る」対象としては「ひらめいた(り)」「見る」である。その「ひらめいたり」はまさに継続していないなら見られないものであろう。従ってこの「ひらめいたり」も今現在まさに継続していることをあらわすことができると言えるであろう。

この6例と7例は前の4例と5例と違うところは動作がある期間内継続していたか、または今現在まさに継続しているかである。4例と5例はある期間内継続していたこと(図3)をあらわしているが、6例と7例は今現在まさに継続していること(図4)をあらわす。これは基準とした発話時間テンスの違いだけで、動作の継続をあらわす点では同じであると思う。図で表してみると、

図3、

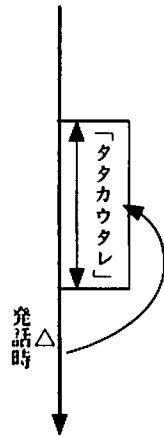
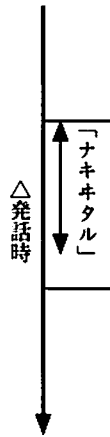


図4、



つまり、「源氏物語」の時代では、「タリ・リ」形は「現代日本語と同様の意味での継続をあらわす形式ではない」ということをしめすものではないかと考えられる(鈴木泰一九九二)としているが、「平家物語」の時代になると、現代日本語の「一シテイル、一シテイタ」と同様の意味での継続をあらわす形式に変わってきたと考えられるであろう。

四、運動の結果の継続

この中にまず二つに分けられる。一つは変化動詞で、その変化を行ったあとの結果の継続の局面にあることをあらわすものである。もう一つは、A動作動詞であるが、動作を行うことをあらわすのではなく、その動作を行ったことよってできた結果が残り続けていることをあらわすものである。即ち動作の継続の局面にあるのではなく、結果の存続の局面にあることである。

(1)、変化の結果の継続

この中にはまた二つの状況がある。

- ①の結果の持続(或いは維持)と②の結果の存続である。①の結果はある期間内維持して(持ち続けて)いるのに対して、②の結果は存在として残り続けているものである。

①、結果の持続(維持)

まず、次の例を見てみよう。

8、…と、いひ送たりければ、唱がかく申すにふせがれて、

神人宮仕しはらくゆらへたり。若大衆どもは、「…」といふ族おほかりけれども、老僧のなかに…棋津堅者豪運、すすみ出でて申しけるは、…(巻①一〇〇一五)

9、日吉社に御參籠あつて、七日七夜が間、祈り申させ給ひけり。…(童神子は)「衆生等慥かに承れ、大殿の北の政所、今日七日わが御前に籠らせ給ひたり。御立願三つあり。…」とて、(巻①九五—三)

10、大師は当山によちのぼつて、四明の教法を此所にひろめ給ひしよりこのかた、五障の女人跡たえて、三千の淨侶居をしめたり。(巻②一三—二)

の三例では、8例は「しばらく」で「ゆらへたり」の期間をあらわしている。9例の「今日七日」は前の「七日七夜が間」も示したように今日まで七日間の間「籠らせ給ひたり」。10例は「ひろめ給ひしよりこのかた」は時間の起点をあらわしている。即ち、その時から今までずっと「しめたり」、それに今もまさに「しめたり」が続いていることをあらわしている。

この8例、9例と10例を見ると前の三の動作の継続の4例、5例と6例、7例と同じところで違っていることに気がつくと思う。8例、9例はある期間内の持続、10例はいままさに持続中であることをあらわす。従つて、「ゆらふ」「籠る」「しむ」

は変化をあらわすものとし、「ゆらへたり」「籠らせ給ひたり」「しめたり」はその変化の結果をあらわすものとする、期間的要素を伴うと、この種の動詞に完了助動詞「〜たり・り」がつくとその結果の状態がある期間内持続していたこと、または今現在まさに持続していることをあらわすことができる。図で示すと、

図5、

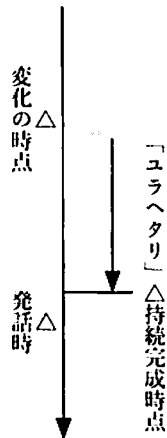
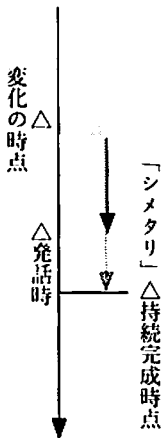


図6、



②、結果の存続

11、「…」しかるを忠盛朝臣、或は相伝の郎従と号して、布

衣の兵を殿上の小庭に召しおき、或いは腰の刀を横だへさいて、節会の座につらなる。兩条希代いまだ聞かざる狼藉なり。事既に重畳せり、罪科尤ものががたし。…」

(巻①四〇一〇)

12、西八条ちかうなつてみ給へば、四五町に軍兵みちみちたり。あなおびただし、何事やらんとむねうちさわざ、車よりおり門のうちにさし入って見給へば、うちにも兵共、ひまはざまもなうぞみちみちたる。(巻②一二四一二三)

13、「比は正月廿日あまりの事なれば、比良のたかね、志賀の山、昔ながらの雪もきえ、谷々の氷うちとけて、水はをりふしまさりたり。白浪おびたしうみなぎりおち、…」

(巻⑨一八二一七)

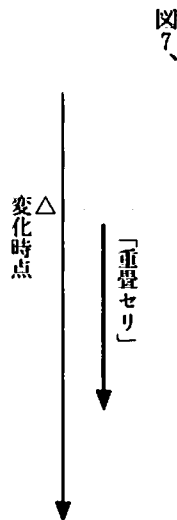
の11の例では、その「布衣の兵を殿上の小庭に召しおき」たことと、「腰の刀を横だへさいて、節会の座につらなる」ことはその話の前に発生した出来事である。この話はそのあと殿上人は上皇に訴える時の話である。この二つの出来事が発生した時点では、「重畳す」変化はすでに行つたはずである。殿上人がその話をしてするときの今現在「重畳せり」というのはその変化が実現したあとの結果が一種の存在として継続している局面にあることだと言える。

12は「西八条ちかうなつてみ給へば、」目の前に現れた状態は「四五町に軍兵みちみちたり」である。即ち、そういう状態は新大納言成親が来る前にすでにあったということである。

「あなおびただし、何事やらんとむねうつさわざ」をしているので、それはいつもあった状態ではないことが分かる。つまり、変化か動作とかに関係のない単なる状態（後に述べる六の単純状態）ではなく、新大納言成親が来る前に変化が起こって、その結果が続いているところに新大納言成親が来たのである。この「みちみちたり」という出来事としていつか終わることであるが、しかし文脈として、新大納言成親にとっておわるか終わらないか問題にされていないことである。従って「みちみちたり」は変化が起こったあとの結果の存在として継続していることをあらわすと言えるであろう。

13の例では、「言もきえ」「氷うちとけて」、それに水は「まきりたり」、これは全部自然の変化であり、後続する「白浪……」から、これらはみんな変化によってできた状態であることが分かる。それから、上記の二つの例のうち「重畳す」ははっきりとした空間と関係する言葉がないが、二つの出来事があったという存在感が読み取れると思う。「みちみちたり」「まきりたり」の場合、目で見える状態である。従って、ここの変化動詞に「

タリ・リ」がついたものの使い方は、変化が過去に行つて、いまの時点としては、変化を行ったあとの結果の存続を言おうとしているのであろう。図にすると、次のような図になる。



つまり、この種の動詞の結果に対するとらえ方は、前の①の変化の結果の持続を表すものと違うと思う。①の変化の結果はふつう臨時的で、元に戻す前題として、起こったものである。

②の変化結果は多くの場合、そういう前題はない、物事の成行きで、自然になった結果である。前の①の「ゆらふ」は「しばらく」だけで、「籠る」は「七日七夜が間」で、臨時的である。11例の二つの出来事の「重畳す」はその二つの出来事ができた時点で自然に「重畳せり」になってしまう。これは現代日本語の中でも同じである。たとえば、「卒業する」という変化動詞の場合一旦「卒業した」ら「卒業している」という結果はほとんど取り消すことのできないことである。それに対して、いく

ら長く「坐っている」としても立とうと思つたら立ちあがって「坐っていない」状態に戻ってしまう。(森山卓郎一九八四)に
はこの種の「動詞の語彙自体に変化の結果を持続させる意味
(維持)が含まれていて、「…ある意味で、結果の維持を続け
る」という進行中の色彩を持つこともある」と指摘なされたこ
とがある。日本語では、「坐った」と言う時、立っている状態
から「坐っている」状態に変わる時点のことを言っているので、
「坐っている」はその変化の結果を表すと考えられているが、

実は中国語ではこの種の動詞はふつう静的動作動詞として扱わ
れる。中国語では「坐着」は言えるが、「死着」は言えな
い。現代日本語ではふつう「坐る」のような動詞も「死ぬ」の
ような動詞も同様に変化動詞として扱っているが、中国語では、
同じ扱いをしていない。「坐」という動詞は「立っている状態
から坐っている状態になる時点」から、「立っている状態に戻
る」までの間の全過程を動作として考えている。先述べたよう
に中国語のこの二種類の動詞の区別のようなものは現代日本語
の中にもある。それに対しては、藤井正氏(一九六六)が次の
ように述べたことがある。「こきざまな運動」の連続であるに
対して、これは「同一の状態の継続」である」と言われていた。

また、中国はもちろん、現代日本語でも、8例、9例、10例

のような動詞の結果の継続と②の結果の継続に対する人間の意
識の中でのとらえ方も違ふであろう。多くの場合、8例、9例、
10例の「持続」とは時間と関連して考えているのが多いに對し
て、②の場合ふつう存続というのは空間のなかでの存在として
考えている。それで、「三時間坐っている」と言えるが、「三時
間死んでいる」とは言えないのであろう。従つて、ここでは、
同じ結果の継続といつても、①のような変化の結果の「持続」
と次の②の変化の結果の「存続」に分けた。

(2)、動作の結果の継続

14、…、此御行様にて、家をもち給へるふしきさよと思ひ
て行く程に、松の一村ある中に、より竹を柱にして、葦を
結び、けたはりにわたし、上にもしたにも松の葉をひしと
取りかけたなり。(卷③三三、一一〇)

15、(清盛入道は)大納言をしばしにらまへ「仰御辺は平治
にもすでに誅せらるべかりしを、…、しかれども当家の運
命つきぬによって、むかへ奉つたり。日頃の御結構の次第、
直に承らん」とぞ宣ひける。(卷②二一九一五)

16、…とて取りいだいて奉る。あけて御覽すれば、「…」と、
よにおとなしやかに書き給へり。母うへこれを見給ひて、

とかうの事も宣はず。(巻鈔四七四—二五)

の三例では、14の「取りかけ」は動作を表すA動作動詞である。その動作が行っている前「取りかけ」ていない状態から「松の葉を取りかけたり」状態になる間に一つ具体的な動作がある。

その動作がまさにに行っていることが現代日本語では「取りかけ」ているというような、動作の進行中をあらわす表現もできる。

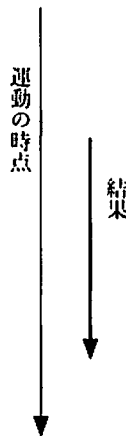
しかし、この14の例では「…、いざわが家へ」と(俊寛僧都が)宣へば、行王がその「わが家」の前に連れられて目の前に「松の葉をひしと取りかけたり」状態が現れたのであるから、その具体的な動作を行っているととは考えられない。その具体的な動作は過去に行つて、いまその具体的な動作を行つたことによつて残した結果が目の前に存在していることしか考えられない。即ち、その具体的な動作を行なわれたことがあるが、それはただ背景として陰になっている。おもてに出ているのはその具体的な動作の行つたことによつて出来た結果だけである。であるから、「取りかけたり」は結果の継続を表していると判断できる。

15例の「むかへ奉ったり」とは清盛は大納言の成親を「捕まえてきた」ことを指している。これは大納言に対面している話であるから、もちろんその動作はその前にすでに終わった。で

あるから、「むかへ奉ったり」はその動作を行っている継続を表すのではない。大納言がここにいるという動作を行つた結果の継続を表している。

16例は、「取り…」から「書き給へり」はいま行っている動作を指しているのではなく、すでに手紙に書いた内容のことを指していることが読みとれる。これも過去にその動作があつていまその動作の結果の継続を表している。図で表してみると次のようである。

図8、



五、変化の完成とその結果の存続

これは変化という運動を行つて、そしてその運動によつて残つた結果は存在していることである。時間の軸でみると、図9のように、運動の完成とその結果をまだ存在していることの両方

を表す。

図9、



さて、次は例でみてみることにする。

17、かくて三年と申すに、又都に聞えたる白拍子の上手、一人出で来たり。加賀の国の者なり。名をば仏とぞ申しける。年十六とぞ聞えし。「昔よりおほくの白拍子ありしが、かかる舞はいまだ見ず」とて、京中の上下、もてなす事なめならず。仏御前申しけるは、「∴」とて、ある時西八条へぞ参りたる。(巻①五一—二)

18、小松のおとは、其後遙かに程へて、嫡子権亮少将車のしりに乗せつつ、衛府四五人、隨身三三人召しぐして、兵一人も召しぐせられず、殊に大様けでおはしたり。入道をはじめ奉つて、人々皆思わずにぞ見給ひける。車よりおり給ふ処に、貞能つと参つて、「など是程の御大事に、軍兵共をば召しぐせられ候はぬぞ」と申せば、∴(巻②一三

一一四)

19、∴、最後を見奉らんとて、∴、すでに只今寄り奉らむとするところにはせついで、千万立ちかこうだる人のなかをかきわけかきわけ、二位中將のおはしける御そばちかう参りたり。「知時こそただ今最後の御有様見参らせ候はんとして、是まで参りてこそ候へ」と泣く泣く申しければ、中將「まことに心ざしのほど神妙なり∴」(巻④四四三—七)

の三例では、17例はまず「かくて三年と申すに」という時間の設定があるので、「出で来たり」は運動の起こった時点を表していることが容易に分かる。それから「京中の上下、もてなす事なめならず」「ある時西八条へぞ参りたる」といった後続している文脈によつては、都に「仏」がいた状態になったことが読み取れるから、その「出で来」という運動は運動としてすでに完成したことが確認できる。それに都に「仏」がいた状態はその運動の完成によつてできた結果としてこの場面には存在していることも言えるであろう。

また、18例は「其後遙かに程へて」の時間設定によつて小松殿の「おはす」という運動の時点を示している。それに「入道をはじめ奉つて、人々皆思わずにぞ見給ひける」の文があとについているし、小松殿が「車よりおり」という次の動作にもす

すんでいることから、その到着の運動はすでに完成し、かつ主体の「小松殿」がまだこの場面にいることはその結果も残っていることを表している。

19の例では、運動の起こるはっきりとした時間の設定がないが、先行の文に一段前の運動の時間の設定がある。その時間の設定のもとにして、それから「参り」という運動が達成するまでの様態説明の「…かきわけかきわけ」によつては、この「参り」という運動は過去の運動ではなく、後続した会話文のすぐ前に起こったことが分かる。また、知時が中将の「御そばちかう」に到着しないと、話したことは中将が聞こえない、それに答えももちろんできるはずはない。であるから「参りたり」はすでに完成した運動であることも分かる。その後続した会話文はその主体はまだ場面に残っていることから、「参りたり」は結果の存在していることも表していると言える。

20、…、なんのゆくゑもおぼしめしよらざりけるに、源三位入道の使者とて、ふみもつていそがしげにていできたり。

宮の御めのと子、六条の亮の大夫宗信、これをとつて、御前へ参り、ひらいてみるに、…(巻④二九二—)

例では、運動の行う時点の設定がある。後続の「これ(ふみ)をとつて、御前へ参り、ひらいてみるに」で「いできたり」と

いう到着の運動はすでに完成したことも分かるが、主体としての「源三位入道の使者」についてなんの話もなく、ただ「持」の客体の「ふみ」だけが残っている。ひょっとしたらその「使者」は「ふみ」を届けたあとすぐに帰ったかもしれない。この点では、上記の三例と違ってただ運動の時点と完成だけを表しているのである。しかしこの例は「もつていできたり」という形でまんに修飾語をいれたものとして考えると上記のほかの例と違った使い方(客体の存続結果?)であることになる。(このような補助的な意味を持っている動詞は今回考察の対象ではない)、このような例はごくまれである。

従つて、ごくまれな例以外、ほとんど前の三例のように動詞に完了助動詞「たりり」がついて運動の完成とその結果の存続を表している。つまり、主体がその運動を行つてから、次にその主体がいた状態で、或いはその主体についての語で語りを進めていくことである。これは「平家物語」の語り物としての完了助動詞「たりり」の使い方の特徴の一つではないかと思う。ある変化、いわゆるある種の運動が起こった。しかし「その運動が起こった」だけではすませずに、その起こったことによつて新しい結果の局面が現れてくる。そして次にその結果の局面について語る。これは語る物語の話の進め方の特徴の

影響であろう。時間の流れを背景にして出来事の発生する順番にそって動と静の交差で現状を再現するという効果であろう。

この使い方の動詞は移動動詞が多い。アスペクト的分類では、移動動詞は変化動詞である。従って、ここでは、変化の完成とその結果の存続という言い方にした。

六、単純状態

これは現代日本語の中にもよくあることであるが、「平家物語」にもある。即ち、動詞自身としては、動作或いは変化を表すことができるが、完了助動詞「〜タリ・リ」がついて、「現象の起こり終わりということを表さずに、ある状態にあることを表す」ことである。例えば、

21、白拍子のはじまりける事は、むかし……。しかるを中比より、鳥帽子、刀をのけられて、水干ばかりを用いたり。さてこそ白拍子とは名付けけれ。(巻①五〇一九)

22、鳥のなかには、たかき山あり。鎖に火もゆ。硫黄と云ふ物みちみてり。かるがゆえに硫黄が鳥とも名付けたり。

(巻②一六六一一〇)

23、同十二月二日、にはかに都がへりありけり。新都は北は

山にそひてたかく、南は海ちかくしてくだれり。

(巻⑤四一一一八)

のようにいつ起こったのか、いつ終わるかそういった運動と関係なく、ただあること(21例は白拍子の由來)に対して説明する、或いは自然の現象(22例は鳥の状態)(23例は新都の地形)について述べているだけである。これも形容詞的な用法であるが、七の性情動詞と違うのは此の類の動詞は語彙的に本来動作か変化を表すものであるが、臨時に形容詞的な用法に使ったのである。この単純状態は現代日本語ではふつう「変化の結果の継続の派生的意味である」と考えている。

図10、

単純状態



七、性状動詞

最後に一応「〜タリ・リ」がついているが、アスペクト的意味の対立を持たないものを見てみる。

『平家物語』における、文末に言い切りとして使われた「イタリ・リ」の中に一応「イタリ・リ」がついているが、アスペクトの意味に関係ないものは次のようなものがある。

24、、、その人とは見え給はねども。なほよの人にはすぐれ給へり。(巻⑩三二八一五)

25、「抑臣等がおもむばかりをもつてえらんで位につけ奉らん事、用捨私あるに似たり。、」(巻⑧二二六一三)

26、凡そは此のおとど、文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり。(巻③二四二一七)

の「すぐれたり」「似たり」のような動詞である。動詞に完了助動詞「イタリ・リ」がついているが、時間に拘らず、変化とか、動作とかの概念から切り離して、品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質などを表す。この種類の動詞も現代日本語の状態動詞と同じようにアスペクト形式の対立を持たない。「すぐれたり」は文末に言い切りとして使われた七例のほか、二十八例がある。連用修飾語として使われた場合、連用形の形も何例か見えるが、その以外全部「イタリ・リ」がついている。「似たり」も同様で、ほとんど「イタリ・リ」がついている。従って、現代日本語の状態動詞「イタリ・リ」がついているものとはほぼ同じであると考ええる。

八、おわりに

以上をまとめてみると、『平家物語』における文末に使われた完了助動詞「イタリ・リ」には次の六つの用法がある。

(1) 動作の完成

(2) 動作の継続

(3) 動作或いは変化の結果の継続

(4) 変化の完成とその結果の継続

(5) 単純状態

(6) 性状動詞につくもの

その用法から、『平家物語』における完了助動詞「イタリ・リ」の使い方には次の三つの特徴が見られる。

(1)、明らかにアスペクトの意味を表していない(6)の性状動詞につくものを除いて、アスペクトの意味として基本的にはやはり現代日本語のように動作の継続或いは変化の結果の継続を表している。それに動作動詞について、その動作の結果の継続を表すこともできる。

(2)、完了助動詞「イタリ・リ」の使い方は主にアスペクトの意味から分類した動詞の種類によって決まる。しかしその中に

同じ動詞で、違うアスペクトの意味を表しているものもかなりあるが、その動詞に関わっている副詞などの文脈によって限定されることができるといえる。

(3)、(1)の動作の完成の用法は現代日本語「イタ」の使い方とはほぼ同様である。それにほかにアスペクトの意味だけではなく、テンシ的な意味を絡んでいるものも多い。

動詞の語彙的な意味、動詞の基本形のアスペクトの意味及びテンシの意味から考えなければ、「イタリ・リ」の本来の意味も明らかにすることができないのであるが、今回はまず『平家物語』の文末に使われている助動詞の「イタリ・リ」の使い方方を考察した結果をまとめてみた。

テキスト：

日本古典文学全集『平家物語』(1)(2) 小学館

参考文献：

(鈴木泰一九九二)

『古代日本語動詞のテンシ・アスペクト―源氏物語の分析―』

ひつじ書房

(王藤真由美一九九五)

『アスペクト・テンシ体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』

ひつじ書房

(寺村秀夫一九八四)

『日本語のシタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

(国立国語研究所一九八五)

『現代日本語動詞のアスペクトとテンシ』秀英出版

(西田直敏一九九〇)

『平家物語の国語学的研究』和泉書院

(金田一春彦一九七六)

『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

(森山京郎一九八四)

『テンシ・アスペクトの意味組織についての試論』『語文』四四

(奥田靖雄一九七七)

『アスペクトの研究をめぐって』『日本語研究の方法』

一九七八むぎ書房

(馬慶株一九八一)

『時量和動詞的類』『中国語文』一九八一・四

注一 「坐る」という意味の動詞に持続をあらわす助詞「着」が付いて、座っている状態が続いている意味である。日本語に

訳すと「坐っている」

注二 現代日本語では、「坐る」と「死ぬ」は同じ類の変化動詞で、「坐っている」と「死んでいる」とも言えるが、中国語では、「坐っている」は「坐着」といえるが、「死んでいる」は「死了」と言う。